

中志報



▲二中健児の塔で焼香をする遺族の方々

二中健児の塔慰靈祭しめやかに行われる

沖縄戦終結から56年、今年もまた6月23日が巡ってきた。城岳公園にある二中健児の塔において、慰靈祭がしめやかにとり行われた。二中の先輩の御靈を慰めるとともに、平和への誓いを新たにした。炎天下の中、遺族、同窓生、那覇高職員、教育実習生及び生徒を含め350余名が参加した。

我那覇生吉教諭の司会のもとで、吹奏楽部・合唱部による二中校歌献楽に始まり、一分間の黙祷、名幸定海護国寺住職の読経、宇良宗真同窓会会長の追悼の辞があり、最後に、伊波陽子生徒会長は「今日のこの日、改めて平和の尊さ、すばらしさが、かくも多くの犠牲の上に成り立っていることを認識し、沖縄からの平和の大切さを発信していくのが、

私達の使命だと思います...。」との誓いのことばを述べた。そして、焼香、弔電紹介とつづき、照屋真遺族会代表のあいさつで慰靈祭は閉じられた。

慰靈祭特集に寄せて

今回は慰靈祭特集として編集した。沖縄戦へ学徒動員させられ死亡した二中生は1年生6名、2年生75名、3年生53名、4年生30名、5年生21名、そして職員は9名であった。

戦争体験を当時の学年別に記載した。紙面の都合でみなさんの手記を割愛して、編集したことをお詫び申し上げ、ご了承下さい。

最後の五年生

5年生 浜 松 昭（二中31期）

昭和16年12月8日、大東亜戦争が勃発するや、緒戦の戦勝気分も険悪化する戦局の為に次第に薄らぎ、私たち生徒も、泊りこみの読谷山飛行場の建設工事に駆り出されるようになった。学友と起居を俱にするということが、まるで遠足気分で、無性に嬉しかったせいか、昼間の土堀り作業も、さして苦にならず、電灯も点かない暗がりの、宿泊所になった座喜味小学校の教室で、ワイワイガヤガヤと騒ぎ、暗さを利用して誰かが、巡視の先生の「あだ名」や、軍属の工事監督者をひやかしたが為に、全員まっ暗な校庭で、蚊に刺されながら、「腕立て伏せ」の体罰を喰らわされたりもした。

戦局は次第に重大さを加え、校舎のあちこちの壁に、「海軍甲種飛行予科練習生募集」のポスターが貼られるようになると、血氣にはやる私たちの間にも、次第に戦列に参加しようという気運が漲り、応募して合格した学友達の空席が、教室のあちこちに目立ってきた。

昭和19年に入るや、戦局は益々逼迫し、久米島近海で敵潜に撃沈された。陸軍部隊の収

容所となった校舎には、軍人と生徒たちが同居するようになり、校舎と校舎の間の空地は、すべて耕されて野菜畠となった。学徒の勤労動員は益々強化され、今日は軍物資の港湾荷役作業に従事したかと思うと、翌々日は、小禄飛行場の拡張工事という、苛酷な勤労動員の連続になった。

志喜屋図書館は軍司令部となり、校舎の大部分は、兵舎と軍の糧秣倉庫となった為、一週間の中、三日は二部授業、三日は勤労作業という、学校としては末期的な状態となり、陸軍部隊が繽々到着すると、まったく自分等の校舎は使はず、楚辺小学校での二部授業になってしまった。

私は志願で、「陸軍特別幹部候補生」に合格し、学友等数人と共に、昭和19年7月13日沖縄を離れたが、これが5カ年間苦楽を俱にしてきた母校二中の学舎と、今は亡き先生方と学友たちとの、最後の袂別になったのである。

（「青春の風紋」より抜粋）

戦禍を逃れて

4年生 高江洲 義 之（二中32期）

昭和16年4月、二中に入学した私共は、米英との国際情勢の悪化を露呈も知らず、ひたすら向学心に燃えて中学生活の第一歩をした。ところが、その年の12月には、大東亜戦争に突入したのである。

一年次で一番印象に残るのが教練の科目で、大城教官から、絶えず「お前らの足の下には蒋介石、ルーズベルト、チャーチルがいる。強く踏んづけて、歩調を取れ」と、あの甲高い声を浴びせかけられたことが、まだ脳裏にこびりついている。二年次の終わりころから、戦況の悪化に伴い、一般家庭では灯火管制、

防空壕掘りにたずさわるようになっていた。僕は下宿生活の身だったが、家主からの協力依頼で壕掘りを手伝った。

三年次からは、本土防衛線上における沖縄決戦が叫ばれ、友軍の陣地構築にほとんどが動員されるようになっていた。学友からも、ある者は内地に疎開し、または、甲種飛行予科練習生に志願して行った。

四年次には、10月10日の那覇大空襲で市内は灰燼に帰した。二中の校舎も戦災を受け、臨時校舎として、松下の自動車学校に移された。

昭和20年1月には、県立第二中学校が鉄血勤皇隊に組織替えになり、3月の卒業式を待たず、金武村金武小学校に集合の命令があった。たしか2月中旬ごろだったと思うが、海軍魚雷艇の兵隊たちと寝起きを共にした。私たちは、配属将校高山中尉の指揮下に入り鉄血勤皇隊員として竹やり訓練に余念がなかった。

小学校の同期だった一中生が、軍隊に志願して二等兵に採用されたといって軍服姿で現れたときは、うらやましくもあった。というのも、三食、食事にありつけるということは、飢餓の生活から脱却したいとばかり考えていた食べ盛りの私たちからすれば、当然のこと

だろう。

私たちは、緊急学徒勤労動員方策に基づいて修業年限が短縮され、四年次で卒業することになったので、軍隊に志願する者も出てきたと思う。

完全に飢餓状態に入った7月の中旬ごろだったと思うが、昼ごろ山から降りて畑で芋を掘っているとき、米軍に包囲され、遂に捕らわれ、収容所に連行された。捕われる寸前、銃口が胸に向けられたとき、思わず僕は「アイ・アム・スクールーボイ」という英語を連発していた。

いくさゆ
(「戦世を生きた二中生」より抜粋)

沖縄戦とハワイ捕虜記

3年生 諸見里 安 弘 (二中33期)

昭和19年の暮、われわれは三年生と二年生に対し、通信隊への入隊テストが行われた。

入隊先は、62師団通信隊（石3599部隊）無線班。首里赤田の教会で30名の同窓生と共に入隊式に臨んだ。

4月26日、夕刻、不運にも、私は通信班学徒の「負傷第一号」になってしまった。二中の先輩で初年兵の高良さんと一緒にいた。飯ごうを洗い終え、民家の石垣のかけで小休止と、壕の入り口に近づいた時、突然、ドカンという大音響と共に目の前が真っ暗になり土が降り、先輩は、ウーンとうなったままだ。私は何はともあれと、販ごうを拾い集め、数歩進むと、左足が焼けた棒をくっつけたようになっていた。見たら血だらけだ。肉がめくれ碎けた骨も露出している。途端に気を失った。医務室で気がついた時は大腿部を締められた左足は天井からつるされていた。重症だ。一ヶ月程医務室にいたが、軍医は居らず、衛生兵が時々、ヨーチンをつけるだけ。従って、足は倍に腫れ上がり、熱発して、飯も喉を通らない。

5月末、戦況不利でとうとう、首里を明け

渡し、南部への撤退命令がでた。

「撤退」。この言葉は45年後の今でも、私の脳裡に、さまざまとあの時の光景をよみがえらせる。中隊長は「これから、南部、山城に向かって撤退する。歩けるなら、ついてこい。歩けなければ自決しろ」と、手榴弾一個を渡された。その外には、靴下一杯の米と、二袋の乾パン。取り残される恐怖と孤独感が心をよぎった。本隊と分れ負傷した少年兵の私には、桜井上等兵をつけてくれた。足の痛みに堪えかね、又、睡魔に襲われ、幾度もたおれた。

闇夜に閃光を放つ照明弾の間隙をぬって泥道を、又、死人のわきを這う様にして懸命に南下した。

上等兵に「もう、私を残して進んで下さい」と、言ったら「バカ、ここで死んでどうする」とビンタを張られ、ようやく、近くの集落まで辿り着いた。途中、南風原の陸軍病院跡に一泊、そこで学徒看護婦からもらい、ほおばったおにぎりは、おいしく、いただいた。

その後、或る民家に入り、そこで偶然に見つけた黒砂糖を口にし、そのまま、床の上で疲労のため寝込んでしまった。何ヶ月振りの

床の上での熟睡だったろう。一週間おくれで本隊に追いついた。薬もないで足の傷口もウジが湧き、そのお蔭で、痒みも止まり、大根みたいなハレもなくなっていた。今では、キタナイ、ウジも唯、漠然と見ているという不思議な心理だった。

6月下旬のある晩、山城の壕内で敵におい

つめられた我が部隊は遂に解散し、14名で決死隊を編成し暗夜に出陣した。

米兵達の激しい射撃をうけた。その直後同期生の山城寛則君等とともに残念にも捕虜にされてしまった。

(「沖縄二中三岳会」より抜粋)

入学当初からの思い出

2年生 佐 敷 興 勇 (二中34期)

昭和18年入学者から定員が50人増え、甲乙丙丁の次に戊組ができた。「一年戊組」見たこともないし読めないのである。

昭和19年10月10日、母校を含め、那覇の大部分が灰燼に帰した。登校下校途中を引き返し機銃掃射の中をかい潜って数本の焼夷弾を消し止めた。

何ヶ月か過ぎて、2、3年生が同窓会館の焼跡に集められ特別防衛通信隊募集の適性検査が行われた。見事落選、日頃の成績はもちろん、当日の成績も悪い筈はないのに選に洩れたのが口惜しくてまんじりともしなかった。

昭和20年2月に入って、第二次の募集があり学校の命令で首里赤田の教会に行かされ即日、無線通信の教育が始まった。これまで愁眉を開き、皆と肩を並べて軍隊教育を受ける誇りで胸が膨れたが、「第一次は次男、三男を採用し、数が足りなくなつて長男をとった。」と戦後になって聞かされ、当時の心境を思い出して複雑な気持ちになったものである。

送受信の訓練がほぼ終り、いよいよ通信隊の勉強に入るというところで米軍の上陸となる。入隊を前に、保護者の元へ帰り入隊志願書に承諾の印を貰ってくるように言われる。

父が出張して中飛行場の建設に当たっている北谷の事務所に赴き、認印をもらって首里的宿舎に帰る途中、B29が飛来し那覇港入口に爆弾を投下した轟音を聞いた。

いよいよ本物の軍人である。石3599部隊、

師団通信隊に入隊、ダブダブの軍服一式と99式歩兵銃、30発の弾薬のついた帯革、戦闘帽に編上靴、一つ星の襟章をいただいた陸軍二等兵。たしか3月26日だった。

飯田隊（無線中隊）北垣内分隊配属となり御茶屋御殿の下に掘られた陣地（壕）に入り軍隊生活が始まった。

しばらくして分隊長が七里操伍長に替り、第52旅団通信隊として派遣されることになって夜の首里を後に荒廃した島尻の戦野を、撤退した旅団司令部の後を追って雨と暗闇の道なき道を探りながらの分隊行動となる。

津嘉山の野戦病院壕に一両日休息し、喜屋武の司令部壕を見つけてほっとしたのも束の間、今度は米須北方の高地に転進、そこで米軍の馬乗り攻撃を受け、旅団長以下斬込みの寸前、師団復帰を命ぜられ、壕入口に向けられた敵の銃火の合間をぬって一人づつ脱出、やっとの思いで摩文仁の第62師団司令部に辿りついたのが沖縄玉碎の前日である。

生き残ったというよりは、死に損なったと言う方が適切であろう。全く地獄の底を這いずり廻るような戦争体験は筆舌に尽くし難い。PWでハワイに連行され、1年3ヶ月を過ごした収容所生活、更にその後のこと、いずれは書き残さねばなるまいが、膨大な量の原稿用紙と時間が必要である。何かしら物足りない感もあるが今回は此の辺で筆を納め、戦死した同胞の御冥福を祈りたい。

(「絆」より抜粋)

あれから半世紀余が過ぎて

1年生 中 村 準 (二中35期 旧姓名嘉村)

私は昭和19年4月、旧制中学最後の県立二中に入学した。太平洋戦争真っ最中の時期で学習以外に小禄飛行場での軍用機避難所づくり、垣花、天久の高射砲陣地づくりや南風原、一日橋附近での作業等に駆り出された。10月10日の大空襲で那覇市は全滅、二中校舎も全焼、約一ヶ月休校となった。11月に入り青空の下で学習、後に一中での二部授業となった。

私達田舎出身は下宿屋を二転三転した。その頃までに他県等へ疎開した同期生も多かった。

昭和20年1月21日第2回目の大空襲があり3月頃から自宅待機となった。南部激戦地配置の通信隊員等除く二年生以上全員と私達一年生全員は鉄血勤皇隊として国頭の金武国民学校に集結する様になり学校からの通知で3月22日に金武に集合のため郷里の与勝半島から早朝出発、約8時間歩き当地に到着した。金武での指示は一旦帰宅し勤皇隊参加承認書に

親の捺印をもらい3月27日までに再度金武に来る様にとのことで22日夜遅く帰宅、翌23日から上陸空襲が連日続き金武行きは困難だった。

私達は各自の行動となり機銃射撃や爆弾の中をさまよいながらよく凌ぎ生き残った。

戦後の昭和58年に知ったのだが二中の教練教師（配属将校）高山八千代大尉（鹿児島県出身）と城間盛善先生（当時英語教師）が話し合い県立二中は校舎全焼のため国頭の金武に移り鉄血勤皇隊を結成する旨日本軍の上層部に主張したことである。有難いご配慮だったと思う。二中の一年生は南部の激戦地に配置されず犠牲者はごく少数であるが犠牲は皆無であってほしかった。先生方や一年生を含む多数の先輩達が健兒の塔に刻銘され改めて平和の大切さを痛感するものである。楚辺原頭から那覇高を守りますように。

同期生会だより

卒業50年誌“追憶”の編集記

二期会会长 幸 地 良 一

私達二期生の学生時代は終戦後の混乱期で、衣食住のすべてが不足し、食べるだけで精一杯の時代でした。母校那覇高校は、米軍の物資集積所や各種部隊が駐屯する旧那覇市内の、沖縄戦で唯一崩壊を免れた天妃小学校の残骸校舎で開校した。壁や天井、床は砲弾で穴だらけ無残な姿であった。それでも当時としては立派なもの。教科書はなく授業は先生の講義を米軍の使用済みの裏紙に速記したのが唯一の参考書であり、勉学の手掛かりであった。そんな状況であったため、高校生活の証しとなるものは何一つなかった。

60歳を過ぎた頃、同期生の中から、青春の証しとなる「卒業アルバム」を作ろうという声が持ち上がり、卒業50周年記念事業として

資料収集に取り掛かったが、3年で写真が僅かに26点であった。これではアルバムは作れないでの、公立の図書館や市町村の資料室、那覇高校、糸満高校、首里高校などを駆け回って、古文書や保存資料などから500点余の写真資料を書き集め、20人の編集員で5年がかり編集し完成した。

編集方針としては視野を広げ、当時の沖縄の社会情勢、市民生活、教育状況が読み取れるように工夫するとともに、那覇市の50年の発展の推移等も収録した。また体験記や思い出文集には、挿絵代わりに160点余の当時の写真を挿入し、その時代の社会や市民生活、教育状況が視覚的に捉えられるように配慮し、戦後沖縄の空白時代の「歴史の証言書」とし

ての色彩を持たせるように英知を絞った。

その編集努力が高く評価され、沖縄タイムスや琉球新報では、沖縄の戦後社会史・生活史であるとして紹介された。また琉球放送は

2回にわたってエリアリポートで取り上げTV放送して貰った。それが異常の反響を呼んで大学教授や研究者、一般市民からの問い合わせや譲渡希望者が続出している。

那覇高校3期生卒業記念誌について

那覇高校3期生 宮 城 調 一

我々3期生は、昭和25年に卒業しましたが、3期生会が結成したのは、32年後の昭和57年です。結成後暫くして、我々は卒業アルバムもなかったので、遅れ馳せながら卒業アルバムを作ろうということになりました。皆が授業風景、運動会、クラブ活動、芸能祭等の写真やスナップを持ち寄りアルバムを作成しました。その後5年置きに、卒業40周年、45周年と記念誌を作っていましたが、昨年は特に我々3期生にとって大きな節目の卒業50周年に当るので、従来の記念誌とはひと味違う記念誌を作ろうということになり、15名からなる記念誌編集部会を立ちあげ、20数回の会合で検討した結果、3つの特色を盛り込みました。1つには、毎年12月1日に行っている懇親会を昨年は特に卒業50周年記念祝賀会と銘打ち海外在住の同期生にも参加を呼び掛けた所、アメリカから4名の参加者がありました。その人達を中心に座談会を持ち、渡米当時の苦労

話や子や孫に囲まれた現在の幸せな生活、望郷の思いなどを語ってくれたので、それを記念誌に載せることができました。2つには、3期生の中に高校時代の日記を保存している者がおり、それが当時の雰囲気をとても良く伝えているので、その日記を「ある高校生の日記」として取り上げさせてもらいました。3つには、多くの同期生に寄稿して貰うために「今の私」という欄を設けました。いわば自己紹介の欄ですが、忙しい人でも手軽に書けるように、氏名、出生年、出生地、出身小学校、那覇高校以前の高校、趣味、家族構成を記入する様式を定め、それと最近の写真1葉と簡単なメッセージの提供を求めました所、予想を上回る寄稿がありました。その他恩師や同期生から多くの思い出や紀行文、各種エッセーが寄せられました。

自画自賛ながら、まずはユニークな記念誌ができたと喜んでいます。

12期の文集「還暦記念号」発刊

那覇高12期 還暦記念誌制作委員会編集長 金 城 紀 春

那覇高校12期は、還暦を記念して文集「龍翔」を5月25日に発刊しました。10年前にも50歳記念の「龍翔」を出したので今回のは、2号になります。60歳は人生の大きな節目とあって文集には同期生の原稿102編、恩師から6編が寄せられました。記念誌は「還暦」の重さが手にズシッと伝わってきます。同期生それぞれが辿ってきた人生模様が綴られ、読む人のこころを和まし、励まし、勇気づけ、

感動をおぼえます。

還暦を迎えた平成12年の3月に催された同期会の場で記念文集の発行が決まりました。

「還暦記念誌制作委員会」が発足、約30人が編集班と財務班を編成しアクションプログラム作りに取りかかりました。原稿集めのために委員会に各クラスから幹事として入ってもらい、幹事が中心となってクラス別に寄稿の呼びかけをしました。財務班は資金づくりに

記念誌の予約（料金の先取り）や広告取りに奔走しました。記念誌発刊に当って編集班会議で確認された事は、「読みやすく、肩肘張らず、おもしろい文集にしよう」ということでした。

編集班会議で、還暦記念誌の目玉に「同期生の活躍動向を主体にした年表」を載せることが決まりました。しかし、掲載基準の「社会貢献」をめぐって意見がかみ合わず、会議で数回にわたって侃侃頽頽の議論を行いました。「社会的貢献度となると、それぞれの持ち場で頑張ってきた人たちの優劣はつけ難い」

との結論に達しました。みんなができるだけ多くの情報を集めて掲載する事になりましたが、情報収集の時間が短くほんの一部の同期生の情報しか年表に記載出来なかった事は、この記念誌制作の上で唯一の心残りになっています。

6月29日には那覇市内のホテルに同期生100人余が集まって還暦記念誌「龍翔」の出版祝賀パーティーを開きました。宴の場で、「これからもお互い心身の健康保持に務め、次は10年後に古希記念誌を発刊しよう」と誓いました。

城岳同窓会定期総会・懇親会

平成13年度定期総会が5月29日（火）午後5時30分より、パシフィックホテル沖縄さんごの間において開催された。

総会には、宇良宗真会長の挨拶の後、会長が議長となり、議事を進行した。

- 議事 1. 平成12年度事業報告
- 2. 平成12年度決算報告
- 3. 平成13年度事業計画
 - (1) 総会・懇親会
 - (2) 二中健児の塔慰靈祭
 - (3) 会報7号の発行
 - (4) 創立記念文化講演会
 - (5) 国外留学奨学金の授与

- 4. 平成13年度予算
- 5. 平成13年度理事の補充

懇親会は6時30分より同ホテル万座の間に開催された。今回は亀島博関東城岳同窓会副会長（那覇高2期）が出席され、祝辞を頂いた。二中の皆さんは所狭しと舞台へかけのぼり、声高々と二中の校歌を齊唱し、最高齢出席者には表彰も行われた。那覇高3期、12期の皆さんからは記念誌発行の報告があり、他の各期からも活発な活動の様子が紹介された。余興、懇談と賑わい、来年の再会を誓い合って閉会した。

関西那覇高校同窓会

6月23日。今年も全国の先陣を切って甲子園地区予選が始まった。昨年の感動を、特に関西那覇高同窓会の感動を皆様にお伝えしたいと思う。それは、平成12年7月16日の日曜、夕方近くに私の携帯電話が鳴った。沖縄の友人から、甲子園出場決定の知らせだった。余りに思いがけないことで一瞬言葉がでなかつた。準決勝迄進んでいたことは、スポーツ紙の報道で知っていたが「頑張っているなあ」程度の想いで、まさか優勝出来るとは!、の気持ちが強かった。その5分後に現在の会長である大城君からも電話があり同様の知らせを聞く。

5日後に幹事会を開き、支援内容の大まかな

幹事 與儀雅康（那覇高20期）



▲甲子園出場記念 宝月にて（神戸）

方針を決めた。寄付のお願いと記念Tシャツの作成、地元新聞への応援広告の掲載などやる事はたくさんあった。寄付も順調に集まり、T

シャツ百枚も月末には完成した。寄付を頂いた方への発送業務、その間に来阪された金城校長、源河事務局長との大阪・兵庫両県人会への挨拶。応援のプラスバンドを演奏してくれる尼崎高等学校へのお願いなど忙しい日々が続く。そして8月8日。感動の開会式に参加して我々のボルテージは上がる一方だった。

その年の同窓会は特別編集の甲子園ビデオを鑑賞しながら、後輩の健闘をたたえたのは言うまでもない。

最後に、20世紀最後の年に素晴らしい感動を与えてくれた後輩に有り余る感謝の気持ちを捧げたいと思う。

◎◎32年ぶり3度目の優勝 全国大会出場◎◎



▲全国大会出場を決めて表彰を受ける

手に汗握る攻防の末、粘って32年ぶりの栄冠を手にした本校サッカー部。

6月6日の県総合運動公園陸上競技場のスタンドは、学校を挙げて応援に駆けつけてきた生徒や職員、父母で埋め尽くされ、優勝を決めた瞬間スタンドは歓喜の渦に包まれた。実に、32年ぶり3度目の優勝である。

決勝戦の相手は、圧倒的な選手層の厚さと、テクニックを誇る強豪那覇西。試合前、大平コーチは「いつもの通りのことをやろう。お前達の持ち味は、粘り強い守りだから、守りをしつこくやってゆこう」と選手たちに話した。対戦した相手の強さ

回戦	スコア	相手
1	13-0	翔南
2	1-0	豊見城南
3	2-0	前原
準々	1-0	沖縄工業
準決	1-0	与勝
決勝	2-1	那覇西

がチームに自信と信頼を与えてくれ、一戦ごとに選手が成長していく、優勝につながった。

来る8月に熊本で行われる全国大会では、那覇高サッカー部の持ち味を發揮し、伸び伸び楽しいサッカーをして欲しい。

◎◎国外留学生に赤嶺理紗さん決まる◎◎

私は、今年の夏から那覇高校同窓会の奨学金で1年間アメリカに留学します。まだ、派遣先が決まっておらず、不安なことが多いのですが、それ以上に期待で胸がいっぱいです。

中学の時から留学したいと考えていたので、こんな貴重な経験ができるることにとても感謝しています。本当にありがとうございます。

このチャンスを活かして、一回りも、二回りも成長して帰ってきたいと思います。

(2年13組 赤嶺 理紗)

◇那覇高校ニュース◇

平成13年（2001年）3月1日、第54回、卒業式が挙行され、476名が卒業しました。今年の卒業生の主な進路状況は、国公立大学62名、私立大学104名で、その他を含めても殆どが進学、又は進学希望者である。

6月に行われた県高校総体では、男子サッカーが32年ぶりに3回目の優勝、剣道で男子個人親川光倫が優勝、相撲の無差別級で与世田卓磨が優勝、ヨットで女子FJ級波照間夏希・島さなえ組が優勝した。その他の種目でも上位入賞があり、総合成績では6位と健闘した。

文化系では全国高等学校囲碁選手権大会友利優子が県代表に、NHK放送コンクールに（朗読部門）古田阿由美が優秀賞で県代表になった。今年も生徒の活躍があり、先輩達の築いた伝統は続く。

城岳同窓会会報

編集発行 城岳同窓会
〒900-0014 沖縄県那覇市松尾1-21-53
電話・FAX 098-867-2525